

平成 30 年度東京芸術劇場舞台技術セミナーVol.8

「響きを想像（イメージ）・創造（クリエイト）する」

開催報告

東京芸術劇場 舞台管理担当係長 石丸耕一

平成 30 年 6 月 5 日、東京芸術劇場プレイハウスにて開催
今回のセミナーでの参加者は 129 名（うち公立施設関係者は 19 名）

主催・東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）

協力・ヤマハ株式会社 ヤマハサウンドシステム株式会社 公共劇場舞台技術連絡会

今回のセミナーの目的

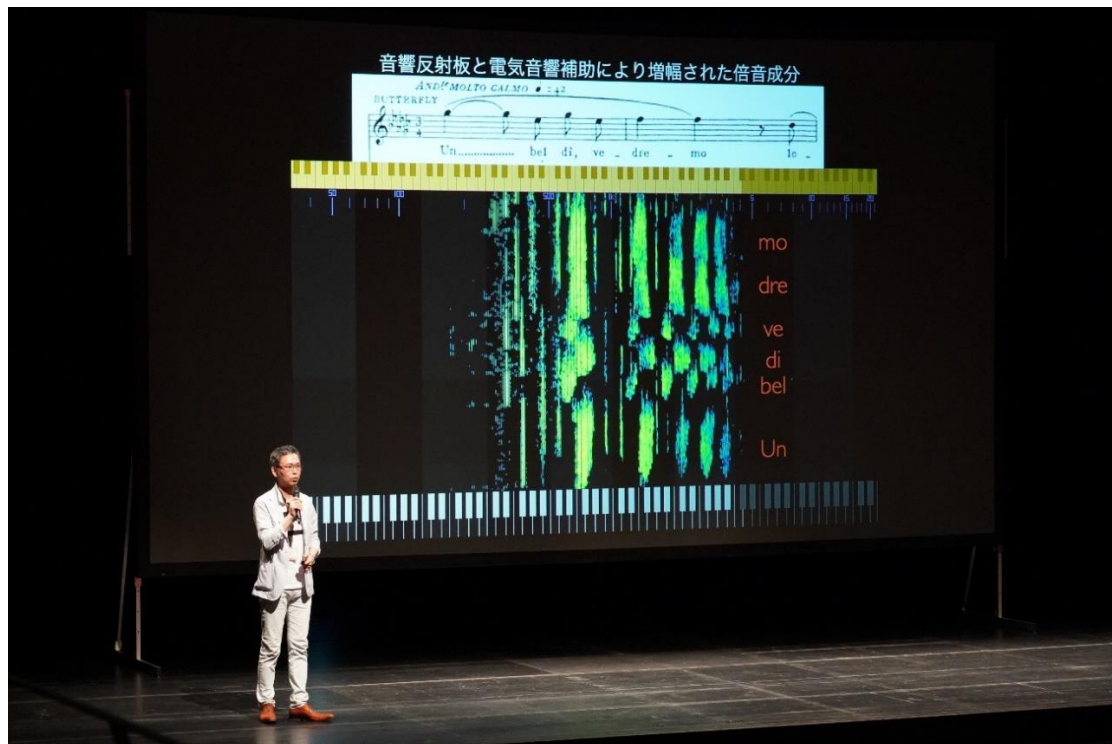
「技術の進歩は演出とニーズが先に立つ。その逆は有り得ない。」

先人からのこの教えを、現在先鋭化する音響技術の進歩、その速度の加速化も進む現時点で、劇場の舞台技術の立場から意志表示するために、今回のセミナーを企画した。

ホールの響きを電氣的に付加するシステムは、評価する声と同時に、存在そのものを否定したがる声も常に拮抗する。

音響技術をどう発展しどう使えば、作る側、使う側、ホールの利用者やお客様の三方それぞれにとって良いものになるのか、それをハンドリングできるのは、創造発信型劇場でデザイナー・オペレーター、劇場管理を兼ねて務められる劇場音響技術者である。

それが無ければ技術の発展は暴走につながりかねない。



第1部 講演「響きを想像・創造する」

第1部は私が担当し、まずは当館での様々な公演で、「公演内容に合わせて響きを最適化する」実例を紹介した。

続いて、その技術を用いて、当館が毎年度参加している「全国共同制作オペラツアー」での、行く先々の上演会場での響きの調整の実例を紹介した。

そして、それらの技術の原型は、1990年と92年に私がモスクワ・ボリショイ劇場でオペラの音響を学んだ際に、元ボリショイ芸術監督ボリス・ポクロフスキー氏より教えられた「1960年代にポクロフスキー氏、作曲家のショスタコーヴィチ氏、指揮者のロジェストヴェンスキー氏の3人の対話の中で生まれた」ものであり、「どうあるべきか」「何をしてはいけないか」がその時点で明確化されていることを紹介した。

つまり、「響きを創生する」技術は、20世紀の終わりにいきなり出てきたものではなく、電気音響技術が未発達だった1960年代にすでに作曲家や指揮者や演出家によって「こうあれかし」と指し示されていたものである。

これを再確認し、「線路を踏み外さないように」技術の進歩を促し、その技術を使用することをご提案させていただいた。

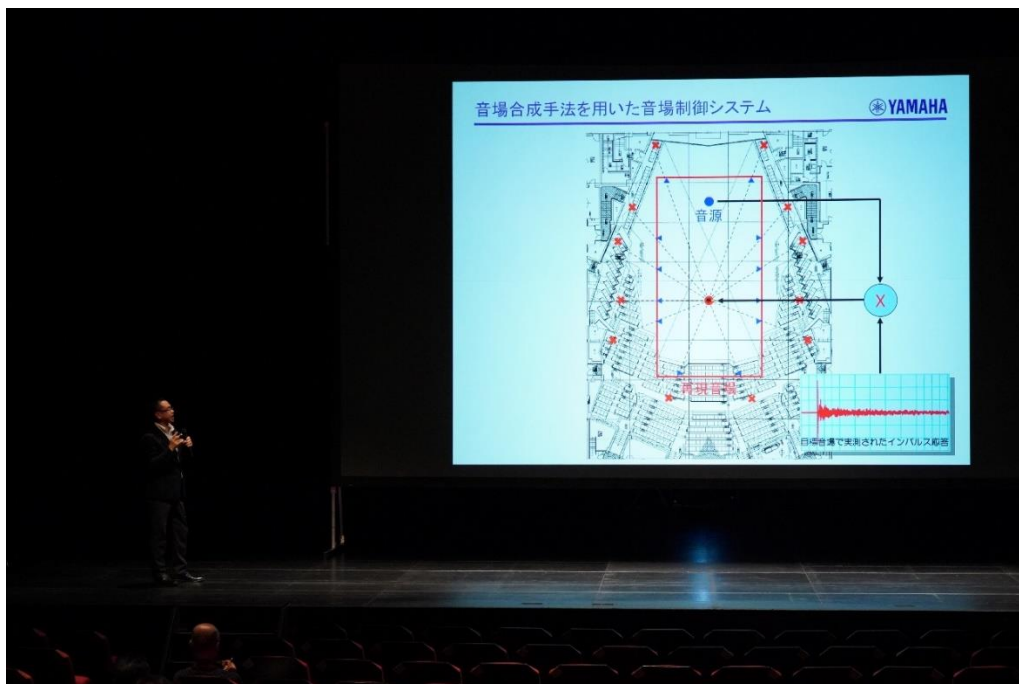


第2部 解説と実演「ヤマハサウンドシステム AFC システムの紹介」

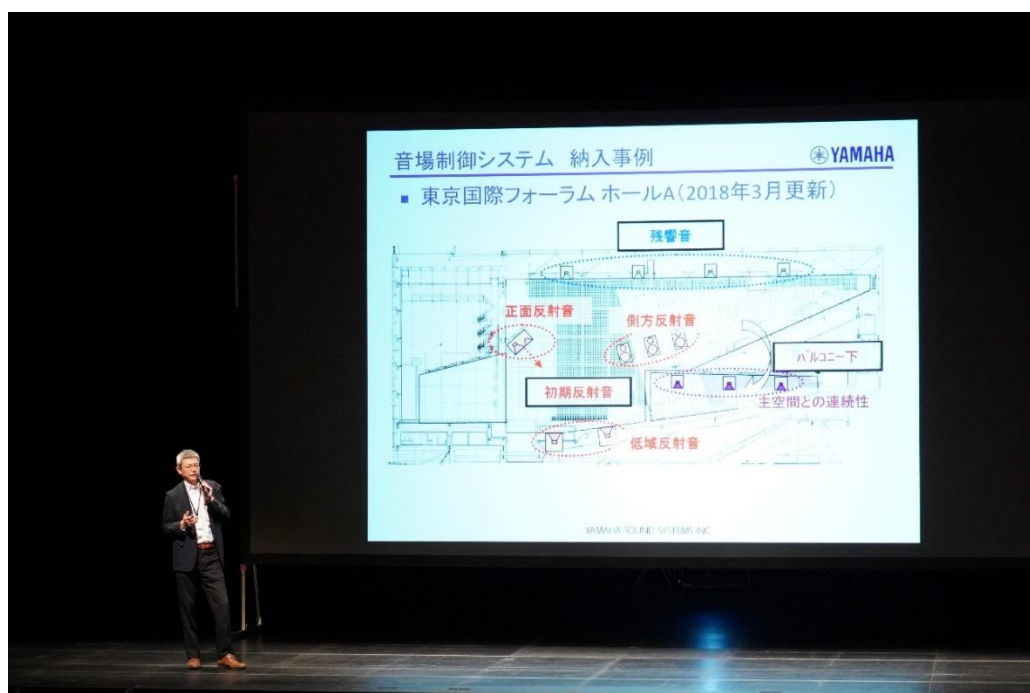
第2部では、ヤマハ株式会社より渡辺隆行氏が「AFC システム」という「響きを創生するシステム」の技術的な説明を、ヤマハサウンドシステム株式会社より兼子紳一郎氏が「システムの導入事例」の紹介をして下さった。

続いて兵庫県立芸術文化センター音響チーフの金子彰宏氏が登壇し、兵庫でのこのシステムの導入の経緯や、実際の公演での使われ方の事例を紹介して下さいました。

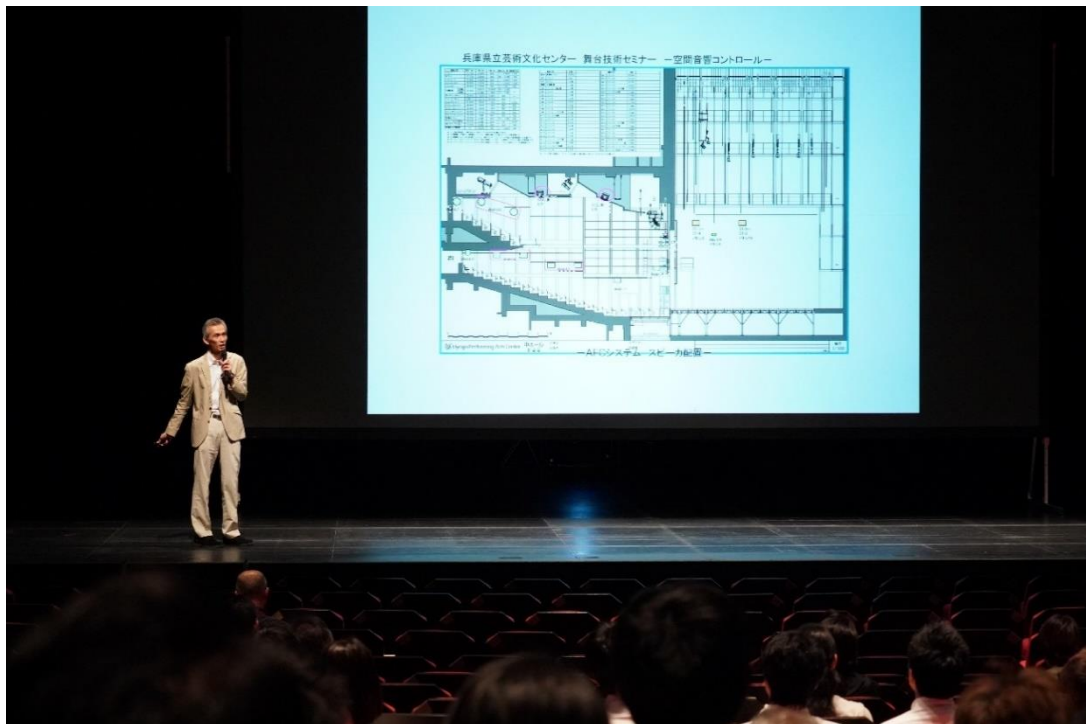
この中で金子氏からヤマハに対し、兵庫ではどのような改善要望が出されたかをご披露いただいた。使う側からならでは的確な指摘は、なるほどと感じさせられるポイントばかりだった。



(第2部 ヤマハ株式会社 渡辺隆行氏)



(ヤマハサウンドシステム株式会社 兼子紳一郎氏)



(兵庫県立芸術文化センター 金子彰宏氏)

第3部実演「プレイハウスでの AFC システムを取り入れた音響空間創生の実験」

第3部は舞台上を飾り変えて、舞台上に音響反射パネルとピアノを設置し、演奏家による実演と共に「AFC システム」の実験を行った。

このツアー用可搬型音響反射パネルは2016年度全国共同制作「マダムバタフライ」で舞台美術家の Tom Schenk 氏に私が依頼して製作してもらったもので、その後当館で保管し、2018年度「ラフォルジュルネ」でも使用して大変好評だったものである。

出演者は、

・オペラの指揮者としてご活躍され、若い頃にコレペティートルの修行もされた佐藤正浩マエストロ。今回はピアノ演奏でご出演下さった。



(第3部 佐藤正浩氏)

・国内外で活躍され、サイトウ・キネンに何度もご出演されているバイオリニスト、佐份利恭子さん。



(佐份利恭子さん)

・数多くのオペラにご出演され、当館のオペラでも何度も主演されているソプラノのプリマ、小川里美さん。



(小川里美さん)

第一線で活躍されているソリストの方々にセミナーの主旨にご賛同いただき、実験にご協力いただけたということは、このセミナーにとって大変貴重なことであった。

出演者には、同じ曲を2回ずつ演奏していただき、それぞれシステムをON/OFFで聴き比べた。参加者も思い思いに客席の中を歩いて聴いて確認して回った。

演奏終了後、三人の出演者と1部、2部の登壇者が舞台上に登壇し、ディスカッションを行った。

出演者、開発サイド、劇場音響技術者が一堂に会して対話する、ということを実現するのが、このセミナーの主旨であり眼目であった。



出演者からは舞台上の響きに対して異口同音に、「客席へ響いた音が舞台へ返ってきて、その「返り」を聴いて次の「1音」をどうするか瞬時に決めている」という発言があった。これは開発にとっては貴重なデータであり、舞台上へただ響きを付加すればいいというわけではないということがハッキリしたわけで、開発の方向の修正を出演者から指摘してもらえたのは有難いことであった。これも技術セミナーならではの有意義な点だと考える。

兵庫の金子氏からは、兵庫の芸術監督である佐渡裕マエストロの、響きに対するイメージやシステムに対する要望と、それを受けての金子氏のアイディアが披露された。それに伴い、システムの仕様変更の必要が金子氏から提案された。

佐藤正浩マエストロは、指揮者として音楽の見識のみならず技術に対しても高い知見をお持ちで、かなり突っ込んだ質問や意見が出された。

会場の参加者からも感想を伺ったが、この類のシステムに対する今後の開発の方向について、直截な意見が多く聞かれた。「響きを創生するシステム」は劇場や出演者のニーズに添って進化する方向を決めないといけないということである。

また、システムの話とは別に、「システムを OFF にした時の、音響反射パネルの効き具合がよく判り、反射パネルの有効性を再認識した」という声が、少なからず聞かれた。



今回のセミナーでは、もう一つ、現状の提示が行われた。

1部と2部で兵庫の金子氏と私が紹介した「響きを公演に合わせて最適化する」作業は、ヨーロッパでは劇場付きの「トーンマイスター」というポジションがそれを受け持っている。

しかし「トーンマイスター」は単にポジションではなく、教育カリキュラムから国家資格、社会的地位と収入の保証まで一貫したシステムなので、日本ではこれの「劇場での業務」の部分のみを、劇場音響技術者が務めているのが現状である。

こういう人材がいる劇場では、今回の「響きを創生するシステム」は、公演ジャンルの本質を踏み外さずに活用することが出来るし、更に言えばシステムがなくても自分で機材をかき集めて、近似する結果を出してしまう。

音楽色の強い公演を自主事業で行う創造発信型劇場の音響技術者がデザイナーを務める際に、求められる作業の一つであるということが再確認されたということである。

(セミナー後の見学の様子)





